『昭和25年、悪役令嬢は日本を滅ぼしたい。』

―転生先は異世界ではなく、朝鮮戦争直前の日本でした―

第二話　許婚がおるんかい

一九五〇年五月二十六日。東京。

鬼神美璃亜が、七十二年前の日本で目を覚ましてから一晩が過ぎた。

「お嬢様。お目覚めでございますか」

「……起きてる」

薄いカーテンの向こうから、朝の光が差し込んでいる。

昨日と同じ、高すぎる天井。細かな彫刻。

中央から吊り下がった、大きなシャンデリア。

目を閉じて。

もう一度開く。

「……夢ちゃうんやな」

侍女が窓のカーテンを開ける。

「何かおっしゃいましたか？」

「なんでもない」

美璃亜は布団の上へ右手を出した。

指を開く。閉じる。

もう一度、開く。

白く粉を吹いていた皮膚がない。

アルコールが染みた亀裂も、爪の横の赤みも。

全部消えている。

「……十九歳の手ぇや」

「お嬢様？」

「こっちの話」

昨夜は何度鏡を見ても同じだった。

頬を触っても、髪を引っ張っても、腕をつねっても。

二十九歳には戻らなかった。

鬼神美璃亜。

十九歳。

一九五〇年。

昭和二十五年。

父親らしい男は、山高帽に蝶ネクタイ、右目には眼帯。

右脚は義足。

どう見ても悪の首領。

そして本当に、何やら怪しい組織の首領だった。

しかも組織の名前は、《日本おしまい倶楽部》。

『我々NOCは――日本を抹殺する』

「……最高」

改めて考えると。

「朝から胃もたれする設定やな」

「本日は、お加減もよろしいようですね」

「お腹減った」

「それは何よりでございます」

侍女が少し笑った。

「朝食は隣のお部屋へご用意しております」

「食堂ちゃうん？」

「まだ病み上がりでございますので、今朝はこちらで召し上がっていただくようにと」

「ああ。そっか」

寝台を降りる。

裸足で床へ足をつける。

昨日ほど身体はふらつかない。

軽い。

というか。

「十九歳って、身体軽いな……」

「お嬢様？」

「二十九になったら分かる」

「？」

「忘れて」

＊

寝室に続く私室には、朝食が用意されていた。

白いリネンを掛けた丸テーブルに、銀のカトラリー。

小さなガラス器に入ったバターと杏のジャム。

薄く焼いたトーストと果物。

そして、湯気を立てる黄色いオムレツ。

「……豪華」

「病み上がりですので、軽めにしております」

「これで軽いん？」

椅子を引いて座る。

目の前には、白磁のティーカップ。

薄い器体に、細い金彩。縁には淡い花模様が描かれている。

受け皿も同じ意匠だった。

「これ、高いやつ？」

「ノリタケでございます」

「……割ったら怒られる？」

「お嬢様のお品でございますので」

「余計怖いやん」

両手で慎重に持つ。

薄い。

2022年に自宅で使っていたマグカップとは、まるで違う。

そっと受け皿へ戻した。

「紅茶をお注ぎいたします」

「お願い」

琥珀色の紅茶が注がれる。

美璃亜は香りを嗅いだ。

「ええ匂い」

「セイロンでございます」

「朝から優雅やな……」

ひと口飲む。

「うま」

続いてオムレツを見る。

表面は滑らかで、綺麗な黄色。

フォークを持ち上げかけて。

止まった。

「なあ」

「はい？」

「ケチャップある？」

「ございます」

「持ってきて」

「かしこまりました」

しばらくして、小さな器に入ったケチャップが運ばれてくる。

美璃亜はそれを見てから、侍女へ顔を向けた。

「これでな」

「はい」

「オムレツにハート描いて」
「……」
　美璃亜はオムレツの上で、指先をハート形に動かした。
「はあと……でございますか？」
「そう」
「何のために？」
「可愛いから」
「……」
「でっかいやつ」
　侍女は数秒、美璃亜を見つめた。
「お嬢様ご自身でなさらないのですか？」
「そこはメイドさんにやってもらうからええねん」
「そういうものでございますか」
「そういうもん」
　侍女は小さな匙を使い、慎重にケチャップを落とした。
　赤い線が伸びて、曲がる。
　もう片側も合わせる。
　黄色いオムレツの中央に、赤いハートができた。
「おおー！」
　美璃亜の目が輝いた。
「上手いやん！」
「ありがとうございます……？」
「写真撮りたい」
「写真？」
「あ」
　ポケットへ手を伸ばす。
　当然、スマートフォンなどない。
「……ないんやった」
「何がでしょう」
「未来」
「？」
　美璃亜はフォークでハートを割った。
「いただきます」
　中は柔らかい。
「うまっ」
　少し食べる。

　また紅茶。

　トーストには杏のジャム。

「転生先、食生活だけは勝ちやな」

「テンセイ？」

「気にせんといて」

　そこで美璃亜は侍女を見る。

「なぁ……」

「はい」

「ちょっと手ぇこうして」

　両手を胸の前へ持っていく。

　指で小さなハートを作る。

「このように？」

「そうそう」

　侍女も真似する。

「ほんで、言うねん」

「何をでしょう」

　美璃亜は満面の笑みを作った。

「萌え萌えきゅん♡」

「……」

「はい」

「……」

「言うて」

「わたくしが？」

「他に誰がおんねん」

　侍女はしばらく黙った。

「……もえもえ」

「きゅん♡まで」

「……きゅん」

「声小さい！」

「必要なのでしょうか」

「未来では重要な接客技術や」

「未来？」

「こっちの話」

「……」

「もう一回」

「萌え萌え、きゅん」

「顔！」

「顔？」

「もっとニコッとして」

「……」

　侍女が不器用に笑った。

「萌え萌え……きゅん♡」

　美璃亜は大きく頷いた。

「合格」

「何にでしょうか」

「接客技術」

「お嬢様……」

「はい？」

「本当にお元気になられましたね」

「意識失う前の私、どんなんやってん」

「……」

　侍女は黙って紅茶を注ぎ足した。

「なんでそこ黙るん？」

＊

　朝食を食べ終えた美璃亜は、椅子へ深く座った。

「ごちそうさま」

「お下げいたします」

「ありがと」

　侍女が皿を片付けていく。

　テーブルには新聞と、一冊の薄い冊子だけが残った。

　まず新聞を広げる。

　見慣れない活字を追ううち、広告に目が止まった。

　《ヒロポン錠》

　《疲労の防止・頭脳明晰化》

　そのすぐ近くには、青少年へのヒロポン常用を問題視する記事。

「売りながら怒ってるやん、この時代」

　ところどころに、昨日ラジオで聞いた名前も見える。

　《マ元帥　対日講和問題に言及》

　《GHQ　接収施設の整理進む》

「マ元帥……？」

二秒ほど考える。

「あ。マッカーサーか」

美璃亜は紙面の日付を見る。

昭和二十五年五月二十六日。

「ほんまや……」

まだ違和感がある。

スマホのニュースアプリではない。テレビでもない。

紙。インクの匂い。

それが今日のニュースだった。

「一九五〇年……」

新聞を畳む。

その下にあった冊子を手に取った。

表紙には大きく、

《NOC》

昨日も見た三文字。

「……日本おしまい倶楽部」

小声で呟く。

ところが、その下を見る。

「日本・大きくなれ・会社？」

《NIPPON OOKIKU COMPANY》

「……ん？」

一文字ずつ読む。

「NIPPON」

日本。

「OOKIKU」

大きく。

「COMPANY」

会社。

「……『なれ』どこ行ったん？」

「意訳でございます」

「雑やな！！」

「……」

美璃亜は冊子を裏返し、もう一度表を見る。

《NIPPON OOKIKU COMPANY》

食器を片付けていた侍女が、表紙の三文字を示した。

「NOCでございます」

「昨日聞いたんと真逆やん」

ページをめくる。

缶詰製造。

水産・食品加工。

鋼管・パイプ加工。

貨物輸送。

機械加工。

倉庫業。

衛生用品。

海外支店。

地図には日本だけではなく、北米、欧州、東南アジアにも印が付いている。

「……でか」

もう一枚。

見たこともない支店名が並んでいる。

「世界中にあるやん」

「はい」

「表だけ見たら普通の会社やな」

「……」

「何で黙るん」

さらにめくる。

「缶詰作って」

一枚。

「パイプ加工して」

一枚。

「荷物運んで」

一枚。

「何屋やねん」

「NOCでございます」

「答えになってへん」

冊子を閉じる。

表紙には、

《日本・大きくなれ・会社》

その裏側では、

《日本おしまい倶楽部》。

「国を騙す気満々やん……」

その時。

　扉が三度、静かに叩かれた。
「美璃亜様。失礼いたします」
「どうぞ」
　扉が開く。
　尹雪姫が入ってきた。
「……」
　昨日とは印象が違った。
　黒いテーラードジャケットに、身体に沿った黒のパンツ。
　ジャケットの内側には、鮮やかな赤いベスト。
　白いシャツの襟元まで隙がない。
　スカートではない。
　十九歳の令嬢が着るような服でもない。
　完全に、仕事をする人間の格好だった。
「おはようございます、美璃亜様」
「おはよう、雪姫さん」
　美璃亜は雪姫を上から下まで見る。
「……それ楽そうやな」
「何がでしょう」
「服」
「そうでしょうか」
「私もそれがいい」
「本日はお召し替えの用意がございます」
「嫌な予感する」
　雪姫は無視した。
「まずは、お加減はいかがでしょう」
「めっちゃ元気」
「朝食も？」
「完食」
「それは何よりです」
　雪姫の表情が、ほんの少しだけ緩んだ。
「キラ様も、大層ご心配なさっておりました」
「……」
　美璃亜の動きが止まった。
「誰？」
「キラ様です」
「そこは聞こえた」

「鷹津司輝様」

「知らん」

「……」

　雪姫が美璃亜を見る。

「本当に何も覚えていらっしゃらないのですね」

「昨日から言うてるやん」

「鷹津司輝様は、美璃亜様の――」

　一拍。

「許婚でございます」

「……」

「……」

　美璃亜は立ち上がった。

「許婚？」

「はい」

「私の？」

「はい」

「男？」

「当然です」

「金持ち？」

「鷹津司家の嫡男ですので」

「……」

　美璃亜の顔が明るくなった。

「来た」

「何がでしょう」

「これ悪役令嬢転生やん！」

「……」

「十九歳！」

「はい」

「金持ち令嬢！」

「はい」

「許婚！」

「はい」

「条件揃ってるやん！」

「何の条件でしょう」

　美璃亜は胸を張った。

「原作ヒロインを追放して、婚約者にはざまぁですわ！」

　雪姫が黙った。

「……」

「何その顔」

「……医師に診ていただいた方が」

「正常や！」

＊

「きっつ！！」

　数十分後。

　美璃亜は鏡台の前で悲鳴を上げていた。

「お嬢様。まだそれほど締めておりません」

「嘘やろ！」

　背後で侍女が、腰回りを整えている。

「もうおしっこチビりそうやねんけど！」

「お嬢様！」

「膀胱に自由を！」

　少し離れたところで待つ雪姫は、相変わらず黒いパンツスーツに赤いベスト。

　美璃亜が鏡越しに睨む。

「雪姫さんだけズルない？」

「何がでしょう」

「その服」

「美璃亜様には、こちらがお似合いです」

「交換しよ」

「いたしません」

　ようやく着付けが終わる。

　用意されていたのは、淡いアイボリーのデイドレスだった。

　パリのクリスチャン・ディオールが流行させた《New Look》を参考に、美璃亜のためだけに仕立てたオーダーメイド。

　肩は柔らかな丸みを帯び、上半身は身体に沿い、腰は細く絞られていた。

　そこから、布を惜しげもなく使ったスカートが大きく広がり、裾はふくらはぎの半ばまで落ちている。

　腰には、細い臙脂色のベルト。

　十九歳の黒髪と、淡いアイボリー。

　黒と赤の雪姫とは、まるで正反対だった。

「……布、多っ」

「美璃亜様がお気に召されていた型です」
「こっちの私、服には金使うタイプやったんやな」
「？」
美璃亜は鏡を見る。
細く絞られた腰。大きく広がったスカート。
十九歳の顔と、長い黒髪。
「……」
どう見ても。
「悪役令嬢やん」
「お嬢様でございます」
「似たようなもんやろ」
「違います」
「雪姫さんは？」
「私は仕事ですので」
「私もこれから銀行行くんやろ？」
「はい」
「ほな私も仕事着でええやん」
「美璃亜様は、キラ様にお会いになります」
「……」
美璃亜はもう一度、鏡を見る。
「許婚に会うだけで、この装備いる？」
「必要です」
「1950年、しんど……」

＊

屋敷の玄関を出た瞬間。
美璃亜の足が止まった。
「……」
車庫がある。
黒い乗用車に、貨物トラック。
業務用らしい車両が並ぶ。
その端に――。
一台のオートバイ。
「……Indian」
雪姫が振り返る。
「美璃亜様？」

美璃亜は数歩だけ近寄った。

大きなインディアンレッドの車体。

タンクに入った文字。

「Chiefや……」

「ご存じなのですか？」

「知ってる」

少し笑う。

「私も乗ってた」

「……」

「何？」

「美璃亜様は、乗馬しかなさいませんでしたが」

「こっちの私ちゃうねん」

「？」

「なんでもない」

指先を伸ばす。

タンクへ触れる寸前で止めた。

「……あとでな」

「美璃亜様？」

「この子に言うてんの」

「オートバイに？」

「そう」

「……」

「また医者みたいな顔すな」

玄関前には、黒塗りの大型セダンが待っていた。

一九四九年型パッカード・スーパーエイト。

丸みを帯びた大きな車体に、長いボンネット。

磨き上げられた黒い塗装に、朝の光が映っている。

「……これもデカ」

運転手が後部座席のドアを開く。

「お嬢様、どうぞ」

「はいはい」

美璃亜はIndianを名残惜しそうにもう一度見る。

そして、アイボリーのスカートを持ち上げながらパッカードへ乗り込んだ。

続いて雪姫。

黒と赤。

　アイボリーと臙脂。
　二人が並ぶと、同じ組織の人間には到底見えなかった。
「鷹津司銀行まで」
　雪姫が告げる。
　エンジンが掛かった。
　美璃亜は座席へ身体を沈める。
「なあ、雪姫さん」
「はい」
「キラ様って、どんな人？」
　雪姫は少しだけ考えた。
「旧華族・鷹津司家のご嫡男です」
「旧華族……」
「あとは、お会いになれば分かります」
「それ、一番困る答えやねん」
　黒いパッカードが、ゆっくり屋敷を離れた。
　窓の外へ、一九五〇年五月の街が流れ始める。

＊

　黒いパッカードが屋敷を離れて、しばらく。
　車内では、ラジオが小さく鳴っていた。
　英語のアナウンス。
　続いて、女の歌声が流れ始める。
　弦楽器を従えた、甘く、少し物憂い旋律。
「……ええ曲やな」
　美璃亜は窓の外を眺めたまま言った。
「《My Foolish Heart》ですね」
「どういう意味？」
「愚かな心、といったところでしょうか」
「……」
「許婚に会いに行く途中で流すタイトルちゃうやろ」
「放送局は美璃亜様のご予定を存じませんので」
「そらそうやけど」
　ラジオのダイヤルには、見慣れない数字が並んでいる。
「これ、どこの放送？」
「FENです」
「FEN？」

「進駐軍向けの放送です」

「ああ……アメリカ軍のラジオか」

美璃亜は、もう一度窓の外へ目を向けた。

一九五〇年五月の東京。

瓦屋根の低い商店。

自転車と荷車。

背広姿の男に、着物姿の女。

ところどころに残る空地。

新しい建物と古い建物が混じり、その間に英語の看板が見える。

そして。

「……」

反対車線から、オリーブドラブの大型トラックが走ってきた。

ダッジの軍用トラック。

荷台には米兵が何人か乗っている。

腰丈のアイク・ジャケット。

ギャリソンキャップ。

一人の兵士は、長い小銃を膝の間に立てていた。

「M1ガーランド……」

「ご存じなのですか？」

雪姫がこちらを見る。

「知ってる。FPSで」

「FPS？」

「あー……」

美璃亜は少し考えた。

「未来の軍事教養」

「……」

「その顔やめてんか」

ダッジが後方へ消えていく。

美璃亜は振り返り、リアウインドウ越しにその姿を追った。

「普通に銃持った外国の兵隊が東京走ってんねんな」

「進駐軍ですので」

「……」

知っていた。

日本は戦争に負けた。占領された。

マッカーサー。GHQ。

学校でも習った。

けれど。

銃を持った外国兵が、普通の朝の景色に混じっている。

それを見ると。

一九五〇年という数字が、急に現実味を帯びた。

「ほんまに負けた後なんやな……」

雪姫は答えなかった。

やがて《My Foolish Heart》が終わった。

運転手がラジオのダイヤルへ手を伸ばす。

ザーッ――。

雑音。

英語が消えた。

代わりに、硬い日本語が流れてくる。

『――続いて、経済の動きをお伝えいたします』

「急に夢なくなった」

『ドッジ・ラインによる金融引締めの影響から、中小企業を取り巻く状況はなお厳しく――』

「……」

美璃亜は眉を寄せた。

「雪姫さん」

「はい」

「ドッジ・ラインって何？」

「経済安定政策です」

「何を安定させんの？」

「主にインフレーションを」

「景気よくするやつ？」

「むしろ逆です」

「逆なん？」

「政府支出を抑え、金融を引き締めます」

「……」

美璃亜は少し考えた。

「景気冷やして熱下げる感じ？」

「かなり乱暴ですが、概ね」

「荒療治やな」

ラジオは続く。

『――また、シャウプ勧告に基づく税制改革について――』

「また知らん名前出た」

「シャウプ博士です」
「誰？」
「アメリカの税制使節団を率いた人物です」
「日本の税金決めに来たん？」
「簡単に申し上げれば」
「……」
　美璃亜は指を折った。
「マッカーサーがおって」
「はい」
「米軍が街走ってて」
「はい」
「経済はドッジで」
「はい」
「税金はシャウプ」
「はい」
「……めっちゃアメリカやん」
「占領下ですので」
「それ言われたら全部終わるな」
　美璃亜は座席へ身体を沈めた。

＊

　やがて、窓の外の景色が変わった。
　建物が大きくなり、背広姿の男たちが増える。
　広い道を、自動車が行き交っていた。
「あ」
　美璃亜が窓へ顔を寄せた。
「何でしょう」
「あれ」
　通りの向こうに、大きな建物が現れた。
　重たい石張りの外壁に、何本もの太い列柱。
　高い窓と、巨大な正面玄関。
「……でっか」
　美璃亜はしばらく眺めて。
「大阪にある三井住友銀行みたいや」
「三井住友銀行？」
「あ」

美璃亜が雪姫を見る。
「まだ合体してへんか」
「……合体？」
「三井銀行と住友銀行」
「三井銀行でしたら、戦時中に第一銀行と合併し、現在は帝国銀行です」
「え？」
「住友銀行は財閥解体により、大阪銀行へ改称しております」
「両方名前変わっとるやん！」
「はい」
美璃亜は銀行を眺めた。
建物の正面には、大きく名が掲げられていた。
《鷹津司銀行》
「ここ？」
「はい」
「銀行いうより城やん」
「銀行です」
「夢ないなあ」
パッカードが玄関前へ滑り込んだ。

＊

鷹津司銀行の中は、外から見るよりさらに大きかった。
高い天井。磨き上げられた床。
太い柱に、真鍮の手すり。
ずらりと並ぶ窓口。
帳簿を抱えた行員たちが忙しなく行き交っている。
電話のベル。紙をめくる音。万年筆が走る音。
その間を、人の声が飛び交っていた。
「……」
美璃亜は首が痛くなるほど天井を見上げた。
「悪役令嬢の城、ここでええんちゃう？」
「何のお話でしょう」
「気にせんといて」
雪姫が受付の行員へ声を掛ける。
「鬼神美璃亜様がお見えです」
その瞬間。
行員の姿勢が変わった。

「少々お待ちください」
　行員が奥へ消える。
　美璃亜はその背中を見る。
「キラ様って、そんな偉いん？」
「鷹津司家のご嫡男ですので」
「旧華族」
「はい」
「銀行御曹司」
「はい」
「許婚」
「はい」
「……王子枠やん」
「王子？」
「こっちの話」
　その時。
「美璃亜さん」
　背後から声がした。
「……」
　美璃亜が振り返る。
　若い男が立っていた。
　背が高い。
　淡いクリーム色のスーツに、白いシャツ。
　青いネクタイと、磨かれた革靴。
　姿勢がいい。顔立ちも整っている。
　……いや。
　かなり、顔がいい。
「……」
「美璃亜さん？」
「……おるやん」
「何がです？」
「あ、いや」
　美璃亜は男を上から下まで見る。
　旧華族。
　御曹司。
　許婚。
　顔がいい。

（攻略対象おるやん）

美璃亜の中で、分類が終わった。

（はい王子枠）

男は、美璃亜の前まで来た。

「よかった」

「え？」

その表情が、わずかに緩む。

「昨夜、鬼神家から目を覚ましたと連絡をいただきました」

「うん」

「ですが、実際にお顔を見るまでは安心できなくて」

「……」

美璃亜は返事をしようとして――

なぜか、身体が先に動いた。

背筋が伸びる。

片足をわずかに引き、スカートの裾へ指を添える。

膝を静かに落とした。

自分では習った覚えのない、妙に完成された礼だった。

「……」

美璃亜は、その姿勢のまま固まった。

（何これ）

身体を起こす。

（私いま、カーテシーした？）

輝は特に驚いた様子もなかった。

むしろ、ほんの少し安心したように見えた。

（待って。こっちの私、ガチのお嬢様やったん？）

男の眉が、わずかに動いた。

「……？」

「何？」

「いえ」

美璃亜を見る。

「随分と……話し方が変わりましたね」

「あ」

美璃亜が雪姫を見る。

雪姫は平然としていた。

「意識を失われた影響のようで」

「大阪弁を脳の後遺症みたいに言うな！！」

　声が銀行中へ響いた。
　何人かの行員が振り向く。
「……」
　美璃亜も固まった。
「めっちゃ響くな、ここ」
「美璃亜様」
「はい」
「お静かに」
「すんません」
　男はまだ美璃亜を見ていた。
「大阪弁……？」
「正常やからな」
「はい？」
「私は正常」
「……そうですか」
「何その間」
　男が少し笑った。
「笑ったやろ」
「いえ」
「笑った」
「少し」
「正直やな」
　美璃亜も、つられて笑う。
　すると男の表情が、また柔らかくなった。
「やはり、よかった」
「何が？」
「お元気そうで」
「……」
　美璃亜は黙った。
（困る）
　もっと冷たくて、高圧的で。
　婚約者を放ったらかして、そのうち庶民の女の子に夢中になって。
　最後には大勢の前で、
《鬼神美璃亜！　貴様との婚約を破棄する！》
　とか言う男を想像していた。

ところが。

目の前の男は、本気で安心したような顔をしている。

（めっちゃええ奴っぽいやん）

（ざまぁしにくいやん……）

「あの」

「はい？」

「キラ様？」

今度は男の方が止まった。

「その呼び方は覚えていらっしゃるのですね」

「やっぱキラ様なんや」

「屋敷の者は昔からそう呼んでいます」

「本名は鷹津司輝」

「はい」

「……キラ様」

「はい」

「強いな」

「何がです？」

「名前」

「？」

「まあええわ」

美璃亜は右手を差し出した。

「改めまして。鬼神美璃亜です」

「……」

輝が、その手を見る。

「自分の許婚から自己紹介をされたのは初めてです」

「私も初めてや」

「でしょうね」

輝は笑い、その手を取った。

「鷹津司輝です」

「よろしく」

「こちらこそ」

握手。

一九五〇年。十九歳の令嬢。

旧華族の御曹司が、許婚。

（……条件揃いすぎやろ）

「輝様」

そこへ。

若い女の声がした。

美璃亜が振り向く。

一人の女性行員が、帳簿を胸に抱えて立っていた。

自分より少し幼く見える。

眼鏡に、きっちり編んだ三つ編み。
派手さのない制服と、真面目そうな顔。

「こちらをお願いいたします」

「ああ。ありがとう、林田さん」

「はい」

少女が帳簿を差し出す。

その時。

美璃亜の視線が、その左手へ落ちた。

「……」

中指が。

途中から、なかった。

ほんの一瞬。

美璃亜の顔から笑みが消えた。

けれど少女は何事もないように帳簿を輝へ渡した。

「では、失礼いたします」

「待って」

「はい？」

少女が振り返る。

美璃亜は改めて少女を見る。
質素な制服。若い銀行員。
そして、旧華族の御曹司のすぐそばにいる。

「……」

（おるやん）

「美璃亜さん？」

輝が首を傾げる。

「この子、誰？」

「行員の林田優子さんです」

「林田優子……」

「はい。林田優子と申します」

優子が丁寧に頭を下げた。

「……」

美璃亜の頭の中で、存在しないはずの人物紹介が猛烈な勢いで組み上がっていく。

眼鏡。三つ編み。真面目な庶民。

御曹司のそばで働く少女。

（来た！　これや）

「……おった」

「何がでしょう」

雪姫が訊いた。

美璃亜は優子から目を離さない。

「原作ヒロイン」

「……」

雪姫。輝。優子。

三人が黙った。

「……はい？」

優子だけが、小さく声を漏らした。

「なんでもない」

「は、はい……」

優子は困ったように頭を下げる。

美璃亜は、その背中をじっと見送った。

（許婚がおって）

（御曹司がおって）

（庶民ヒロインもおる）

（これ絶対、恋始まるやつやん）

口元が緩む。

「ふふ……」

「美璃亜さん」

「何？」

「先ほどから、何をそんなに楽しそうにしているのです？」

「別に」

「とても別には見えませんが」

「キラ様」

「はい」

「人生には、知らん方が幸せなこともあるんやで」

「……記憶を失った方に言われると、妙に説得力がありますね」

「誰がうまいこと言え言うた」

輝が笑った。

その隣で。

雪姫が、静かにため息をついた。

＊

三人は、銀行奥の応接室へ通された。

革張りのソファ。

低いテーブル。

大きな窓の向こうには、東京の街が見える。

先ほど優子から受け取った帳簿に目を通していた輝が、それを閉じた。

「美璃亜さん」

「はい？」

「このあと、お時間はありますか」

「帰るだけやけど」

「でしたら――」

輝は少し考えてから言った。

「銀座へ行きませんか」

「銀座？」

「快気祝いです。お好きなプリン・ア・ラ・モードをご馳走します」

「行く！」

即答だった。

「……早いですね」

「甘いもんに検討時間はいらん」

「以前から、そこは変わりませんね」

「……」

美璃亜の動きが止まった。

「……好きやったん？」

「ええ。かなり」

「プリン・ア・ラ・モード？」

「特に」

「……」

「どうしました？」

「いや」

美璃亜は少しだけ視線を逸らした。

自分の知らない自分。

十九歳の鬼神美璃亜。

その好物を。

この男は覚えている。

「ほな」
　美璃亜は気を取り直した。
「銀ブラもしよ」
「銀ブラ？」
「銀座ブラブラ」
「買い物も？」
「する」
「プリンも？」
「食べる」
「全部ですか」
「快気祝いなんやろ？」
「そうでした」
　輝が笑った。
「では、全部にしましょう」
「よっしゃ！」
「美璃亜様」
　横から雪姫の声がした。
「何？」
「私は先に戻ります」
「え？」
「NOCで用件がございますので」
「私置いてくん？」
「輝様がお送りくださいます」
「もちろんです」
　輝が当然のように答える。
「……」
　美璃亜は雪姫を見る。
「雪姫さん」
「はい」
「今、わざと二人にした？」
「何のお話でしょう」
「その顔、絶対分かってる顔やん」
「存じません」
「逃げんな！」
「それでは、美璃亜様。輝様」

　雪姫は一礼した。
「ごゆっくり」
「ほら！　絶対分かってるやん！」
　雪姫は答えなかった。

＊

　銀行の玄関を出る。
　朝乗ってきた黒いパッカードは、雪姫を乗せて先に走り去っていった。
「……」
　その後ろ姿を見送り。
　美璃亜は、玄関前に停まっている別の車へ目を向けた。
「……かわいっ」
　淡い水色の車体に、長いボンネット。
　大きく湾曲したフェンダーと、陽光を弾くクローム。
　幌を下ろした、大型のオープンカー。
　一九五〇年型ビュイック・ロードマスター・コンバーチブル。
「これ、キラ様の？」
「ええ」
「水色なんや」
「お気に召しましたか？」
「めっちゃ好き」
「それはよかった」
　美璃亜は車の周りを半周する。
「王子、車まで爽やかやな」
「私はいつから王子になったのですか」
「さっきから」
「そうですか」
「諦め早いな」
　輝が助手席側のドアを開いた。
「どうぞ」
「え、開けてくれんの？」
「いけませんか？」
「ちゃう」
　美璃亜は少し笑う。
「ええやん」
　アイボリーのスカートを両手で持ち上げる。

布をドアに挟まないよう注意しながら、助手席へ身体を滑り込ませた。
輝がドアを閉める。
続いて運転席へ。
「キラ様、自分で運転するんや」
「好きですから」
「へえ」
エンジンが目を覚ました。
低い振動。
淡い水色のロードマスターが、ゆっくり銀行を離れていく。

＊

東京の街を走る。
幌を下ろしているせいで、街の音がそのまま車内へ入ってきた。
クラクション。自転車のベル。
タイヤが路面を転がる音に、人の声。
美璃亜は髪を押さえながら、忙しそうに左右を見ていた。
「ほんまに東京なんやなあ……」
「先ほどから東京ですよ」
「初めてやから楽しいねん」
「……」
「あ」
輝がこちらを見る前に、美璃亜が指を差した。
「あれ何？」
大きな建物の屋上で、星条旗が風を受け、大きくはためいていた。
「第一生命館です」
「生命保険？」
「建物はそうですが、現在はGHQ総司令部が使用しています」
「……ここが？」
「ええ」
美璃亜は身体を少し乗り出した。
玄関前には米兵。
そして。
一台の黒い大型車が停まっていた。
「……キャデラック」
「ええ」
輝が前を見たまま答える。

「でも」

　美璃亜が目を細める。

「ナンバー……」

　赤いプレートに、五つの白い星が並んでいる。

「五つ星？」

「マッカーサー元帥の車でしょう」

「……」

　美璃亜は思わず振り返った。

　黒いキャデラックの後ろで、星条旗が風に膨らむ。

「マ元帥、ほんまにおるんやな……」

「もちろんです」

「新聞の中の人みたいな感覚やったわ」

　水色のビュイックは、そのままGHQ前を通り過ぎていく。

　美璃亜はしばらく後ろを見ていたが。

「……まあええわ」

「何がです？」

「今日は銀ブラや」

「切り替えが早いですね」

「恋の物語にマッカーサーはいらん」

「恋？」

「あっ」

「……」

「今の忘れて」

「聞かなかったことにしましょう」

「頼む」

＊

「おおお……！」

　銀座へ入った途端。

　美璃亜の目が輝いた。

「銀座や！」

「はい」

「東京や！」

「東京です」

「都会や！」

「そうですね」

「反応薄いなあ！」
「私は何度も来ていますので」
「初見の感動を共有して！」
　輝が笑った。
　水色のビュイックは銀座通りを抜け、一本脇へ入る。
　輝が車を寄せた。
　エンジンが止まる。
「着きました」
「よっしゃ」
　美璃亜がドアへ手を掛ける。
「美璃亜さん」
「何？」
「スカート」
「あ」
　危うく裾を踏むところだった。
　アイボリーの布を抱え直す。
「1950年の女、車降りるだけで難易度高いな」
「以前は普通に降りていましたが」
「前の私、器用やな」
　美璃亜は慎重に車を降りた。
　続いて輝。
　水色のビュイック・ロードマスター。
　アイボリーのドレス。
　淡いクリーム色のスーツ。
　美璃亜は周囲を見回した。
「……よし」
「何がです？」
「銀ブラ開始や！」

＊

　歩き始めてすぐだった。
「あ！」
　美璃亜が顔を上げる。
「時計塔！」
「美璃亜さん？」
「行こ！」

　急に歩調が速くなる。
「待ってください」
「銀座の時計塔やろ！」
「そうですが――」
　三越より先に。
　美璃亜は時計塔のある建物へ向かった。
　広がるスカートの裾を押さえながら、足早に進む。
「東京来たらこれ見なあかんやろ！」
　ところが。
　近づくにつれ。
「……」
　美璃亜の歩みが遅くなる。
　建物には、大きく英語が掲げられていた。
《EIGHTH ARMY EXCHANGE SERVICE》
　そして。
《TOKYO P.X.》
「……」
　美璃亜は看板を見る。
　輝を見る。
　もう一度、看板を見る。
「キラ様」
「はい」
「これ何？」
「PXです」
「何屋？」
「進駐軍関係者向けの購買施設です」
「買い物できる？」
「私たちは入れません」
「……」
　美璃亜の顔が曇った。
「出禁？入られへんの？」
「利用資格がないだけです」
「実質出禁やん……」
「違います」
「東京来て最初の観光地で出禁食らった……」

「観光地でもありません」
「時計塔やのに！」
「時計塔であることと、観光地であることは別です」
「理屈が冷たい！」

＊

PXの近く。
路上に、小さな箱を置いた咥えタバコの少年がいた。
靴磨きだった。
十代前半くらいだろうか。
客を見つけると、こちらへ視線を向ける。
「……」
美璃亜は少年を見る。
それから。
隣の輝を見る。
「キラ様」
「何です？」
「あの子、蹴り倒したりせーへんよな？」
「……」
「何？その顔」
「美璃亜さんは、私を何だと思っているのです？」
「旧華族の銀行御曹司」
「それと少年を蹴ることに、どのような関連が？」
「悪役令嬢ものやと、金持ち男に嫌な奴おるやん」
「……令嬢もの？」
「そこは気にすんな」
輝は小さくため息をついた。
そして少年の前で足を止める。
「お願いできますか」
「へい！」
少年がぱっと顔を上げた。
輝は何事もないように片足を台へ乗せる。
「……」
美璃亜はじっと見る。
「何です？」
「ほんまに蹴らへんな」

「まだ言っているのですか」
「確認や」
　靴を磨いていた少年が、思わず笑った。
「あ」
　美璃亜が指を差す。
「今笑ったやろ」
「い、いえ！」
「キラ様の味方しよったな」
「美璃亜さん」
「何？」
「少年を困らせないでください」
「はい」
「返事だけは素直ですね」
　磨き終わると、輝は代金を払い、少年に礼を言った。

＊

「三越あるやん！」
「ありますよ」
「行こ！」
「今日はよく走りますね」
「十九歳やからな！」
　銀座三越。
　美璃亜は店へ入るなり、完全に機嫌を直した。
　帽子、手袋、バッグ、化粧品。
　目につくものを一つずつ眺めていく。
「キラ様」
「はい」
「これどう？」
　帽子を被って振り返る。
「似合っています」
「早い」
「何がです？」
「ちゃんと見て」
「見ていますよ」
　輝が改めて美璃亜を見る。
「とても似合っています」

「……」

「どうしました？」

「そういうん、サラッと言うん禁止」

「褒めてほしかったのでは？」

「そうやけど！」

「難しいですね」

「女心や」

「勉強しておきます」

「ほんまに？」

「ええ」

「……これ買う」

「帽子を？」

「うん」

美璃亜は照れ隠しのように帽子を脱いだ。

「あと手袋も」

「先ほどの？」

「そう」

「よく似合っていました」

「もう褒めんでええ！」

「なぜです？」

「今はええねん！」

店員へ帽子と手袋を渡す。

「お包みいたします」

「お願いします」

美璃亜はバッグを探る。

「……」

止まった。

「どうしました？」

「キラ様」

「はい」

「スマホ決済できへん」

「……」

「現金しかないんやった」

「当然ですが」

「2022年の癖が抜けへん……」

　輝が財布を取り出した。
「私が」
「いやいや！　自分で払う！」
「快気祝いですよ」
「プリンだけちゃうかったん？」
「そのくらい増えても構いません」
「キラ様、女に金使い慣れてへん？」
「どういう意味です？」
「原作ヒロインにも同じことしたら許さんで」
「原作ヒロイン？」
「なんでもない」
「そういや、キラ様」
「はい」
「アメリカに行った事あるん？」
「ええ。昨年まで留学していました」
「ほな美味しい店とかいっぱい知ってんの？」
「甘いものなら、多少は」
　美璃亜の目が輝いた。
「ケーキ」
「好きですね」
「アイス」
「好きです」
「チョコ」
「もちろん」
「……」
「何です？」
「王子様のくせに甘党なんや」
「ですから王子ではありません」
「設定盛ってんなあ……」
　輝が笑う。
　美璃亜も笑った。
　その顔を、輝がしばらく見ていた。
「美璃亜さん」
「ん？」
「よく笑うようになりましたね」

「……」

「以前より」

　一瞬。

　美璃亜の笑みが止まった。

「……あかん？」

「いいえ」

　輝は首を横に振った。

「その方が、私は好きです」

「……」

「美璃亜さん？」

「キラ様」

「はい」

「プリン」

「今ですか？」

「今すぐ」

「分かりました」

　美璃亜は先に歩き出した。

（あかん）

（こいつ、たまに強い）

＊

　銀座のアイスクリームパーラー。

　扉を開けると、コーヒーと甘い菓子の香りが混じっていた。

　白いクロスを掛けたテーブルに、ガラスの器と銀色の匙。

　洋装の男女が、静かに談笑している。

　その中に。

「……」

　美璃亜の目が、奥の席で止まった。

　カーキ色のオフィサーシャツを着た米軍将校が二人。

　袖には、第八軍のパッチ。

　その隣には、赤い口紅を引いた派手な洋装の日本人女性。

　英語を交えながら、楽しそうに笑っている。

「どうしました？」

「いや」

　美璃亜は視線を戻した。

「プリンの方が大事」

「まだ注文もしていませんよ」

「はよしよ」

二人は窓際の席へ通された。

椅子へ腰掛ける瞬間、背筋がすっと伸びる。

スカートを乱さず、手袋を外して重ね、ナプキンを自然に膝へ置く。

輝の視線が、その手元に一瞬止まった。

「？」

「いえ」

輝は何も言わず、メニューを開いた。

「プリン・ア・ラ・モードを二つ。それとコーヒーを」

「二つ？」

「ええ」

「キラ様も食べるん？」

「もちろんです」

「……」

「何です？」

「王子様がプリン食うんや」

「王子ではありません」

「しかもアラモード」

「好きなので」

「かわいいな」

「……」

「あ」

「今、何と？」

「なんでもない」

しばらくして。

二つのガラス器が運ばれてきた。

黄色いプリンに、白いアイスクリーム。

色とりどりの果物と、生クリーム。

美璃亜の目が輝く。

「……きた」

「どうぞ」

「いただきます！」

匙を入れる。

一口。

「……！」

「いかがです？」
「うまっ！」
「それはよかった」
　向かいでは、輝もプリンをひと匙すくっている。
「ほんまに食うんやな」
「注文しましたから」
「食べ方まで上品やな」
「プリンに食べ方の違いがありますか？」
「ある。知らんけど」
　輝が笑った。
　その時。
　奥の席にいた米軍将校が、こちらへ少し身を乗り出した。
『Excuse me. Do you have a light?』
　美璃亜が目を瞬く。
　輝は何事もないように振り返った。
『Of course.』
　懐からマッチを取り出し、火を点ける。
『Thanks.』
『You’re welcome.』
　将校が席へ戻った。
「……」
「何です？」
「キラ様、英語ほんまにペラペラやん」
「ええ。アメリカで学んでいました」
「聞いたけど、実際しゃべってんの見ると違うわ」
「そうですか」
「何勉強してたん？」
「金融と国際取引です」
「……」
　美璃亜はプリンを食べながら輝を見る。
「ほんまに銀行御曹司として育成されとるやん」
「育成？」
「英語、金融、銀行、旧華族、顔よし」
「最後は勉学と関係ありませんね」
「設定に無駄がない」

「何の設定ですか？」
「こっちの話」
　輝は首を傾げながら、胸ポケットへ手を伸ばした。
　取り出したのは、白い煙草の箱。
　中央に、大きな赤い丸。
《Lucky Strike》
「煙草吸うんや」
「ええ」
「名前は聞いたことある」
「アメリカにいた頃からです」
　一本抜く。
　マッチを擦る。
　小さな炎。
　煙草の先が赤く灯った。
　輝が一口吸う。
　白い煙が、ゆっくり上へ流れていく。
「甘党で喫煙者なんや……」
「両立しませんか？」
「属性また増えた」
「？」
　輝は煙を横へ吐いた。
　けれど。
　店内の空気に流され、薄い煙が美璃亜の方へ来る。
「けほっ」
「すみません」
　輝はすぐに煙草を灰皿でもみ消した。
「いや、そこまでせんでええよ」
「嫌でしょう？」
「……まあ、好きではない」
「では吸いません」
「……」
　何でもないことのように。
　輝は再びプリンへ匙を入れた。
　美璃亜は、その顔をじっと見る。
（そういうとこやぞ、王子）

　また一つ。
　ざまぁする理由が減った気がした。

＊

「そういやキラ様」
「はい？」
「アメリカから帰ってきて、すぐ銀行で働いてんの？」
「ええ。父のもとで、海外取引のある企業をいくつか担当しています」
「海外取引……」
　美璃亜の匙が止まった。
「NOCも？」
「もちろん」
「……」
「何です？」
「金貸してんの？」
「銀行ですから」
「日本おしまい倶楽部に？」
「……」
　今度は輝の匙が止まった。
「何です、それは」
「あ」
「NOCのことでしょうか」
「……」
「私が存じているのは《NIPPON OOKIKU COMPANY》ですが」
「表向きはな」
「表向き？」
「なんでもない！」
「かなり気になるのですが」
「企業秘密や」
「あなたは昨日まで、その会社の仕事にもほとんど関わっていなかったはずですが」
「細かいな！」
「銀行員ですので」
「そういうとこだけ鋭いねん」
　美璃亜はプリンへ逃げた。
「それで」
「はい」

「NOCとキラ様が取引してるから、私と知り合ったん？」
「そうです」
　輝はコーヒーを一口飲んだ。
「帰国して間もない頃、NOCへの融資案件を担当することになりました」
「へえ……」
「海外との取引が非常に多い会社でしたから、私が適任だったのでしょう」
「それで？」
「ご挨拶に鬼神氏のところへ伺いました」
「おっさんに？」
「……」
　輝が目を瞬いた。
「何？」
「以前は『お父様』と呼んでいましたが」
「あ」
「鬼神氏を、そう呼ぶようになったのですね」
「まあ……色々あって」
「その『色々』が気になるのですが」
「そこは気にすんな」
「かなり大きな変化だと思いますが」
「プリン食べ」
「話を逸らしましたね」
「続き」
　輝は苦笑した。
「その時、鬼神氏から紹介されたのが美璃亜さんでした」
「私？」
「ええ」
「どんなんやった？」
「どんな、と言われましても」
「第一印象」
　輝が少し考える。
「綺麗な方だと思いました」
「……」
「それから」
「まだあんの？」
「随分、静かな方だとも」

「……」

「今とは違いますね」

「悪かったな」

「悪いとは言っていません」

　輝が笑う。

「何度かお会いするようになって。その後、両家から許婚の話が出ました」

「……政略結婚？」

「始まりは、そうでしょうね」

「やっぱり」

　美璃亜は少し安心した。

　ほら。

　悪役令嬢っぽい。

　ここから不仲になって。

　原作ヒロインが現れて。

　婚約破棄――。

「ですが」

「ん？」

「それだけなら、私は断っていました」

「……」

「美璃亜さん？」

「……プリン食べる」

「先ほどから食べていますよ」

「もっと食べる」

「そうですか」

　美璃亜はプリンを大きくすくった。

（あかん）

（コンボや）

＊

　パーラーを出る。

　美璃亜の手には、三越の小さな紙袋が提げられていた。

「楽しかったですか？」

「めっちゃ」

「それは何よりです」

「キラ様」

「はい」

「またプリン奢ってな」
「ええ」
「即答やん」
「甘いものに検討時間はいらないのでしょう？」
「……覚えよった」
「勉強しました」
「女心？」
「少しは」
「成長早いなあ」
　その時。
　美璃亜の頬に、冷たいものが当たった。
「ん？」
　空を見上げる。
　もう一滴。
　歩道にも、ぽつ、ぽつと黒い染みが増えていく。
「キラ様」
「はい」
「雨降ってきたで」
　美璃亜は、路肩に停めてある水色のビュイックを見る。
「オープンカー、どないするん？」
「幌を上げますね」
「あ、ちゃんと屋根あるんや」
「なければ困ります」
「晴れの日専用かと思った」
「そんな車ではありませんよ」
　二人は少し足を速めた。
　輝が幌を上げる。
　淡い水色の車体の上を、黒い幌が覆っていく。
「おお……」
「そんなに珍しいですか？」
「オープンカー乗ったことないねん」
　輝が助手席のドアを開いた。
「どうぞ」
「ありがと」
　美璃亜は三越の紙袋を先に車内へ置く。

　続いて、アイボリーのスカートを両手で持ち上げた。
「今度は挟まへんで」
「上達しましたね」
「十九歳、適応力高いねん」
　布をドアに挟まないよう慎重に助手席へ身体を滑り込ませる。
　輝がドアを閉めた。
　続いて運転席へ。
　エンジンが掛かる。
「NOCまでお送りします」
「お願い」
　水色のビュイックが、雨の銀座を離れた。

＊

　走り始めてしばらくすると。
　雨脚は、少しずつ強くなっていった。
　フロントガラスを雨粒が流れる。
　濡れた路面が黒く光る。
　幌を叩く雨音。
「結構降ってきたな」
「ええ」
「さっきまで銀ブラしてたのになあ」
　輝が小さく笑った。
　その時。
　信号が赤になった。
　ビュイックがゆっくり停まる。
「……ん？」
　美璃亜が助手席の窓の向こうを見る。
　雨の中を、一人の男が歩いてきた。
　五十前後だろうか。
　伸び放題の髭。
　頭には、くたびれた水兵帽。
　身につけているのは、古びた旧海軍の第二種夏用上衣。
　本来は白かったはずの布地は黄ばみ、汗と埃に汚れ、さらに雨を吸って身体へ貼りついている。
　セーラー襟から、水が滴っていた。
「……海軍？」

　男はこちらへ近づいてきた。
　そして、美璃亜の窓を軽く叩く。
　コン、コン。
「……」
　美璃亜は少し迷ってから、窓を下げた。
　途端。
「うっ」
　思わず鼻に手をやる。
　雨。
　汗。
　垢。
　古い煙草。
　濡れた布。
　湿った臭いが、車内へ入り込んできた。
　男は美璃亜の反応を見て、苦笑した。
「すまんな、お嬢さん」
「いや……」
　男は助手席越しに、運転席の輝を見る。
「旦那」
「はい？」
「煙草一本、もらえんか」
　輝は少しも嫌な顔をしなかった。
　胸ポケットへ手を入れる。
　取り出したのは、白い煙草の箱。
　中央に、大きな赤い丸。
《Lucky Strike》
「どうぞ」
　一本抜き、美璃亜の前を通して男へ差し出す。
　男は雨に濡れた手で、それを受け取った。
「……」
　煙草を見る。
「アメリカ煙草か」
「ええ」
　美璃亜は男の水兵服へ目を向けた。
「海軍やったん？」

男は少し黙った。

「……昔な」

「……」

輝がマッチを取り出す。

美璃亜が少し身を引くと、輝は助手席側へ身を乗り出した。

一本擦る。

小さな炎が灯った。

雨に消されないよう、片手で火を囲う。

男も窓へ顔を寄せた。

火が煙草の先へ移る。

赤く灯った。

男は深く吸い込む。

「……ふう」

煙が、雨の中へ溶けていった。

男はLucky Strikeを指に挟み、少しだけ笑う。

「敵さんの煙草を吸う日が来るとはな」

乾いた笑いだった。

信号が青になる。

「ありがとうよ、旦那」

「お気をつけて」

「ああ」

男が窓から離れる。

美璃亜は窓を上げた。

外の音が少し遠くなる。

輝が車を発進させた。

「……」

美璃亜は振り返った。

雨の向こう。

小さくなっていく水兵帽。

濡れたセーラー襟。

その指先には。

一本の白い煙草。

口の中にはまだ、プリンの甘いカラメルが残っていた。

車内には、幌を叩く雨音だけが残る。

「キラ様」

「はい」
「戦争終わって……まだ五年も経ってへんねんな」
「ええ」
「……そら、まだおるよな」
「何がです？」
　美璃亜は、もう一度だけ後ろを見た。
「戦争が」
　輝は何も言わなかった。
　雨だけが降っていた。

＊

　夕方。
　雨は、細い霧雨に変わっていた。
　水色のビュイックが、NOCの玄関前へ滑り込む。
　エンジンが止まった。
「着きました」
「ありがと」
　美璃亜がドアへ手を伸ばす。
「あ」
「？」
「そのままで」
　輝は先に運転席を降りた。
「キラ様？」
　車の前を回ってくる。
　雨の中。
　輝はクリーム色のジャケットを脱いだ。
「え？」
　助手席のドアを開く。
「どうぞ」
「いや、雨――」
　美璃亜が顔を出した瞬間。
　ふわり。
　頭の上から、ジャケットを被せられた。
「……」
「濡れますから」
「キラ様は？」

「私は少しくらい構いません」
「いやいや、そっち白シャツやん！」
「美璃亜さん」
「何？」
「スカート」
「あ」
美璃亜はジャケットを頭に被ったまま、三越の紙袋を手に取った。
アイボリーのスカートをまとめる。
すると。
輝が手を差し出した。
「……」
今度は何も言わず。
美璃亜は、その手を取った。
アイボリーの裾を持ち上げたまま、濡れた地面へ足を下ろす。
頭の上には、輝のジャケット。
目の前では。
白いシャツ姿の本人が雨に濡れている。
「……キラ様」
「はい」
「こういうん、どこで覚えたん？」
「何がです？」
「そういうとこ」
「？」
美璃亜はジャケットの下から、輝を見上げた。
（……私）
（いつざまぁしたらええんや）
「今日、楽しかったで」
「私もです」
「またプリンな」
「ええ」
「次は私が奢るわ」
「では、楽しみにしています」
「……」
「？」
「次ある前提なんや」

「ないのですか？」

「……ある」

　輝が笑った。

　美璃亜も少し笑う。

「ほな、また」

「ええ。また」

「これ」

　玄関の庇の下まで来て、美璃亜は頭からジャケットを外した。

　輝へ返す。

「ありがとう」

「どういたしまして」

　輝が運転席へ戻り、ドアを閉める。

　水色のビュイックが、濡れた道路を走り去っていった。

　美璃亜は玄関先に立ったまま、その後ろ姿を見ていた。

「……」

　許婚。

　王子枠。

　原作ヒロイン。

　銀ブラ。

　プリン・ア・ラ・モード。

（私、何しに一九五〇年来たんやろ）

　少し笑った。

　けれど。

　さっきの男の姿が、頭をよぎる。

　雨に濡れた水兵服。

　指先で赤く灯った、一本の煙草。

　美璃亜はNOCの建物を見上げた。

　そして、中へ入った。

＊

　Kは、執務室にいた。

　山高帽。

　右目の眼帯。

　黒いモーニング。

　机の上には、書類が積まれている。

「戻ったか、美璃亜」

「ただいま」
「輝とは会えたか」
「会った」
「どうだった」
「……」
　美璃亜は少し考えた。
「ええ奴やった」
「そうか」
「ざまぁしにくい」
「何？」
「こっちの話」
　Kはそれ以上聞かなかった。
　美璃亜も、少しだけ笑っていた。
　だが、机の前まで来たところで、その笑みが消える。
「おっさん」
「何だ」
「ちょっと話あんねん」
　Kが顔を上げた。
「聞こう」
　美璃亜は一度だけ息を吸った。
　一九五〇年五月二十六日。
　窓の外では、まだ雨が降っている。
　あと、ひと月。
「一か月後――」
　Kをまっすぐ見る。
「朝鮮戦争、始まるで」

――――――